

土佐浄瑠璃と歌舞伎

——「京四条おくに歌舞伎」と「当世小国歌舞伎」——

鳥居 フミ子

一

元禄・宝永期に江戸浄瑠璃界の中心的存在であった土佐浄瑠璃は、人形劇としての演劇性の獲得のために懸命の努力を重ねていた。当時、庶民の間に浸透していた能の利用は枚挙にいとまのない程であるが、近世初頭より三都の人気を次第に高めてきた歌舞伎の応用も意欲的に行われていた。

ここにとりあげる土佐浄瑠璃「京四条おくに歌舞伎」は歌舞伎「当世小国歌舞伎」を活用することによって脚色されたものである。本稿では「京四条おくに歌舞伎」が歌舞伎を摂取しながらどのように人形劇としての魅力を獲得しているかをみることにによって、土佐浄瑠璃における歌舞伎摂取の方法を考えてみたい。

二

「当世小国歌舞伎」と「京四条おくに歌舞伎」は、歌舞伎の始祖出雲のおくにが歌舞伎や人形浄瑠璃の登場人物となった最初の作とする論がある。^{注1}しかし、この両作は京四条河原に興行された遊女かぶきの再現で、両作に登場するおくには遊女であって、出雲のおくにではない。

近世初頭には歌舞伎の流行につれて歌舞伎の始祖とされるおくにの名が喧伝されるようになっていた。慶長末年には、おくにが名古屋山三の亡霊と逢っていっしょにかぶき踊りを踊るといいう能仕立の内容の「歌舞伎草子」が作られ、^{注2}おくにと山三の姿が広く親しまれるようになった。また、一方、出雲のおくにのはじめたかぶき踊りは、慶長末年には遊女達の演ずる遊女かぶきに発展して多くの観客を集めるようになった。遊女かぶきの流行は多くの文献や絵画資料によって伝えられている。例えば『そゝろ物語』（寛永十八年板）には、

江戸にはやり物しなく有といへども、よし原町のかぶき女にしくはなし、(小野晋『近世初期遊女評判記集』／＼古典文庫 昭和40年Vによる。以下同じ。)

と、遊廓吉原におけるかぶき女の流行を伝えており、中でもかつらぎ太夫の評判の高かったことを次のように述べている。

江戸に名をえし女かぶきおほしといへ共、中にもかつらき太夫は、世にこえみめかたちやさしく、ようがんびれいなりければ、此かふきをこそ見めと、老若貴賤群集し、見物す

太夫ふたいへ出、秘曲を尽しまひあそぶよそほひ、たゞ是、

天人の舞樂かや、

『当代記』慶長十三年五月の条には、駿府にかぶき女や傾城共が多く、ややもすれば喧嘩があるので追放すべき由を大御所が仰せられたとある。^{注3}慶長の頃、かぶき女の流行は駿府でも追放令を出さなければならぬほどになっていたことが知られる。『舞曲

扇林』(元禄二、三年頃成立)には、これらの遊女達の多くが「お郡小太夫」と名乗って人気を集めたと記されている。歌舞伎の創始者とされる出雲のおくににちなんだ多くのおくにと名乗る遊女達が美しい姿態をみせながら舞踊をして人々の心を把えたのである。『舞曲扇林』には、遊女かぶきの代表たる佐渡島かぶきは「お郡哥舞妓」とも呼ばれたと記されている。遊女かぶきはお

くにかぶきとも呼ばれ、慶長から元和の頃にかけて全国的に盛行し、おくにの名は遊女かぶきのかぶき女を代表する名として人々に親しまれることになったのである。

遊女かぶき禁止の後には野郎かぶきへ展開していくのであるが、近世初頭に急激に発達して人心を集めた遊廓や遊女は野郎かぶきの好んで取りあげるところとなり、廓場や傾城買は野郎かぶきの重要な演目となった。廓場には多くの遊女達が登場する。かぶき女おくにの名を持つ遊女おくにが元禄歌舞伎の登場人物として人々の前に現われることになったのである。

このようにして、歌舞伎狂言「当世小国歌舞伎」、土佐浄瑠璃「京四条おくに歌舞伎」に近世初頭に流行した遊女によるおにかぶきがとりあげられたのである。

三

「当世小国歌舞伎」は元禄十二年霜月の刊記のある絵入狂言本がある。^{注4}奥書によれば市川団十郎の作で、森田勘弥座で上演されたものである。

あらすじは次のようである。

〔第一番目〕(ふうりうぶがくの袖

付り赤松むしやの助がいさめ)

平時広・弟行盛は吉田稻荷に中宮平産の代参をする。時広と通じる雲分親王は中宮平産の祈願をよそおって帝調伏のために吉田稻荷に参詣する。親王や兄時広の悪心を見抜いた行盛は二人に諫言するが容れられず、親王一派の滅亡を予言して退出する。

行盛を恋する深草長者の娘やどりきの前は若衆姿にやつして神前に恋の成就を祈る。諫言の容れられなかった行盛は自殺しようとして神主国冬にとめられる。やどりきの前は行盛の出家の決心を盗み聞きして落胆し、自殺しようとする。国冬は行盛とやどりきの前を夫婦にし、深草へ落す。

將軍義政の臣赤松武者之助が社参の役を果して帰ろうとする。と雲分親王は武者之助が下馬先を乗馬のまま進んだことを責め、争いとなる。

東山殿の侍吉良幹之進は四条河原のおくにかぶきを見物にく。おくにが楽屋入りしようとする所へ、義政の執権山名左衛門が幾千代姫の岩戸神楽の指南役としておくにを迎えにく。山名は逃げてきた振袖の女を太夫くへの進物の入っている長持にかくす。山名とおくには女を追いかけてきた雲分親王の手勢をきりちらす。

〔第二番目〕(たいしやくしゆらのきつちやき)

付り山名さへもんがちぼう)

幾千代姫が鼓の稽古をしているところへ細川勝元・仁木入道が大殿義政の使者として、舞楽をつとめた御祝儀の屏風を持参する。

勝元は鼓を打ちながら姫にぬれ事をする。姫の兄の秋太郎が邪魔をするので、勝元は秋太郎に面をかぶせて三番叟を教え、姫と誓紙をとりかわしていると、義政がこれを見て腹を立てる。

仁木入道が勝元と姫を讒言するので、義政は勝元と姫に縄をかけて討とうとする。荒獅子男之助が現われて命乞いをする。が義政は許さず、姫斬首の太刀取は男之助、検死は仁木入道、勝元殺害は幹之進に命じる。

勝元が幾千代姫を慕って自害しようとするので、秋太郎と幹之進は姫の無事を勝元にあかし、姫を呼び出して勝元に逢わせる。仁木入道の郎等が討手にくるが勝元はこれを追いかう。

〔第三番目〕(ゆふしよくぶれいかう)

付りあらしゝ男之助か武道)

山名左衛門は男之助が姫を殺したと思い、男之助を討とうとする。と板垣民衛門がとめるので板垣の首を討ち落す。山名と男之助は討ち合いになるが、男之助が姫を助けていることが

分かり、山名は姫の住家を訪ねることになる。

男之助は悪人を滅ぼすために雲分親王の邸に奉公人となって入り込み、女房は六条三すじの遊君おくにとなる。

雲分親王は遊君おくにを呼び出して酒宴を開き、おくにを口説く。酒宴の席に山伏がとび込んできて、勸進帳を読み上げる。男之助は山伏に討ってかかるが、互に名をあかすと山伏は赤松武者之助であった。

雲分親王がおくにになびくように迫ると、おくには氣絶する。男之助はおくにを介抱し、嘆き合っていると仁木入道が二人の身分を見抜き、二人を討とうとする。武者之助・男之助・おくにの三人はこれに応戦し、時広と仁木を殺す。

〔第四番目〕（つづみが滝うちおさめたるいゑ）

付ほそ川かつもとがけいりやく

万乗の主となった雲分親王はつづみが滝に酒宴をもよおす。幾千代姫は狂気となり、病気の兄を車に乗せて滝の温泉につれてくる。

老翁が現われて滝に落した鼓を拾うように幾千代姫に頼む。姫が鼓を取り上げてみると、以前勝元に形見としてつかわした初音の鼓であった。老翁は実は勝元であると名乗り、姫との再会を喜び合う。

雲分親王は郎等をひきつれて勝元と姫をとりかこむが、武者之助・男之助・小左近が現われて雲分親王を討つ。

帝を調伏して謀反を企てる雲分親王・平時広・仁木入道らの悪人を武者之助・男之助・おくにの三人が力を合わせて滅ぼすことを主筋に、やどりきの前と平行盛、幾千代姫と細川勝元の恋の成就をからめたものである。

「当世小国歌舞妓」は、市川団十郎・大谷広右衛門・上村吉三郎・宮崎伝吉・荻野沢之丞などの名優の出演で大当りであった。とりわけ荻野沢之丞の太夫おくには好評であった。役者評判記『役者談合衝』（元禄十三年三月刊）の荻野沢之丞の条には次のようにある。

おくにかぶきといふ狂言に、傾城けいせいの所作・さつはりと出来ました。中に、山名左衛門とのぐぜつのてい・さりとよは能うつり、其後男の介女房となり、ふるかねかいのあいさつ・とかふ申されぬ大あたり。　（『歌舞伎評判記集成』による）

荻野沢之丞は「当世小国歌舞妓」第一番目で太夫おくにとなり、四条河原の遊女かぶきの楽屋入りの場面に登場する。山名左衛門役の宮崎伝吉が大殿義政の命で、姫君に鼓を指南するようにと太夫くにを迎えにくる。荻野沢之丞と宮崎伝吉は劇を中断して、そ

れぞれ東下りして久し振りに江戸の森田座の舞台で共演することになったいきさつについて口上を述べる。つづいて、沢之丞は幾千代姫役で出演する実弟上村吉三郎を観客に紹介する。

沢之丞は第三番目で、雲分親王館の場に遊女おくにとなって再び登場する。雲分親王はおくにの美しさにひかれて口説き落そうとする。おくには下男となって奉公に入り込んでいる夫男之助や今井慶となつて屋敷に入り込んだ武者之助と力を合わせて悪人時広と入道を討つ。

「当世小国歌舞妓」は荻野沢之丞のおくにを売りものにした狂言であつた。そのおくには遊女かぶきの太夫おくにであり、男之助の妻がやつした遊女おくにであつた。題名の「当世小国歌舞妓」は出雲のおくにの劇化を意味するものではなく、遊女かぶきの舞台化を意味するものであつたのである。第一番目で四条河原のおくにかぶきを東山殿の侍幹之進が見物にでかける場面がある。

てんかになをゑしおくにかぶきを、けんぶつにいで いろ
く おかしきいゝくさ有り へおくにかぶきが一世一だいのしよ
はしまつたく
けいおひたゝしき 筆にもことはにものへられす

ここでは四条河原の遊女かぶきの群舞の模様が演じられたものと思われる。「当世小国歌舞妓」ではこのような遊女かぶきを「おくにかぶき」と呼び、それを題名に用いているのである。

四

土佐浄瑠璃「京四条おくに歌舞妓」は、扉に「宝永五戊子初秋上旬」の年号のある木下甚右衛門板の正本がある。また、木下板の正本に貼られている「六段物板行出来合目録（六段物目録）」には二十八番めに載っており、初期の段物集には収載されておらず、後期の段物集「蘭曲千代竹四」に、「七夕名哥よせ」「葭原土手八景」「うき世道成寺」の三段が収められている。以上のような状況から、「京四条おくに歌舞妓」は元禄末より宝永初年頃のもの^{注5}と推定される。この頃は土佐浄瑠璃の最盛期で、初代土佐少掾橘正勝の晩年に相当する。

「京四条おくに歌舞妓」は、江戸森田座における「当世小国歌舞妓」の好評に刺激されて脚色されたものと思われる。各所にその影響がうかがわれる。

まず、「京四条おくに歌舞妓」のあらすじをみて、両者の影響関係を考えることにする。

〔第一〕 今川仲秋公が女郎のかぶき見物にでかけ、かぶき女おくととの逢う瀬のままならないことを嘆いていると、お家横領の野心のある大道寺江平は、忠臣荒川刑部とその子小六郎（小六）を追い払うように讒言する。

今川家の宝蔵の虫干の日、江平が帰った後で、小六が宝物の番をしていると仲秋公の妹かほるの前が近づいて小六に武器の説明をさせ（節事）、小六を口説く。小六が姫を諫めると姫はがうの太刀を抜いて自害しようとする。がうの太刀はひとりでに抜けて飛び廻り、姫を負傷させる。

この物音に仲秋公、荒川刑部、大道寺鉄山・江平父子が現われ、小六を一討にしようとするが、刑部は自らの手で小六を殺すことを願う。鉄山父子が即座に小六を殺すようにと仲秋公に迫るとき、床に飾られた着背長が動き出し、甲の下から丹波次郎時秀が現われて鉄山父子の逆心の証拠をあげるが仲秋公はきき入れず、かえって丹波次郎を勘当する。

〔第二〕 鉄山父子は仲秋公の関東入国の折に仲秋公を討つ相談をする。

仲秋公は在京の御免あって関東へ入国の行列をする。鉄山父子は上意と偽って仲秋公の城をとり巻き、戦鬭となる。城中に裏切り者が現われ、仲秋公は自害しようとする。荒川刑部は馳せ参じ、仲秋公を落して城中の矢倉に駆け上り、腹十文字にかき切って死ぬ。

〔第三〕 大道寺江平は本城をのっとり、今川かげゆの助照早と名乗って世にはびこり暮すが、小六と丹波次郎を討ちもらし

たことが気がかりになり、家臣を遣して探させる。

七夕の夜、かほるの前は照早（江平）の恋を退けて乳人藤が枝と共に池に舟を浮べ、水に歌を流して小六への恋の成就を祈る（節事）。

照早が姫の船に飛び乗ってきて口説く。姫は偽って照早と祝言の盃をした後、守本尊を水中に落す。照早がこれを探して水中にとび込み、水面に浮いてきた時、姫と藤が枝は照早をさんざんに斬り、東の方をさして落ちる。

〔第四〕 かほるの前は奴姿にやつして小六を探しに吉原へ行き、丹波の助太郎と名をかえた丹波次郎に逢い、小六のいる茶屋へ連れていかれる。

小六が勝山と盃をくみかわしている所へ、かほるの前が現われて小六に恨み言をいう。小六は、勝山は実は四条に名高い遊女おくにで、仲秋公のために吉原に身を売って敵を討つたでをしている、と説明する。

大道寺の郎等二人が飛び出して討ってかかるが、小六は駆け付けた丹波次郎と共に二人を生捕り、勝山を請出して都へ上る。

〔第五〕 鉄山は仲秋公の行衛を尋ねて都に入り、析柄江戸より帰って再び四条河原に棧敷を立てているかぶき女おくにに近

づこうとして見物に行く。

鉄山が棧敷から舞台上に上って、おくにを根引きしようというので、おくには鉄山をだまして釣燈蓋の下へ導く。丹波は釣燈蓋を切り落して鉄山をとりおさえ、小六・姫君と共に鉄山を討つ。

〔第六〕 今出川大納言公直卿の山荘に忍んでいた仲秋公は鉄山父子の討たれたことを知り、義政公に御勘気御免を願う。公直卿の口添えで仲秋公は許され、もとの官禄に復す。

「京四条おくに歌舞妓」は、かぶき女おくにの活躍が強調されて表面に押し出されている。

おくには、主君仲秋公と恋愛関係という設定になっている。おくには仲秋公を殺害してお家を横領しようと企てている悪人達に對して、終始仲秋公を守る立場になっている。おくには「当世小国歌舞妓」では忠臣男之助の妻として、男之助を助ける脇役として活躍したのであったが、本曲ではおくにの活躍を一曲の主軸にしたのである。おくにの登場は主筋に直接かわる場面として各所で見せ場を展開することになっている。

まず第一の見せ場は、本曲の発端のおくにを中心とする女郎達の遊女かぶきの場面である。仲秋公は江平を供にしておくにの踊

りを見物している。

序薬手

下
ハル入

下

ハル入

「おどろ。きそへや。らくやうの花の。ちよらうの。なりふりは、うき世ぼうしをしやんときて、はやす拍子のそろふた、

哥トメ

華やかに踊る遊女かぶきの場面を発端としてお家横領の陰謀へと進む。仲秋公はおく自由に逢えるようになるとそのかされて、忠臣を追放させようとする悪人の讒言を信じてしまう。これがお家騒動の始まりとなるのである。

次におくにが登場するのは三段めである。

おくには大道寺鉄山父子のために城をのっとられて逼塞している仲秋公のために、吉原に身を売って勝山と名乗り、敵を討つてだてをする。

歌舞妓「当世小国歌舞妓」では、男之助の妻が身を売って遊女くにとなることになっている。この男之助の妻のやつした遊女くにと、第一番目に登場していたかぶき太夫おくにとの関係は狂言本でみる限り明らかではない。かぶき太夫おくにが男之助の妻となったことは狂言本の中ではどこにも知らされていない。また、事件の展開の上からも太夫おくにと男之助の妻のやつした遊女おくにが同一人物であるという必然性はうかがえない。この狂言で、男之助の妻が遊女おくにとなることにしたのは、おくにの名にこ

だわったためであろう。しかし、出演の役者は第一番目の太夫おくと第三番目の遊女おくには同じ役者荻野沢之丞である。観客には太夫おくと男之助の妻おくと同じ人物としてうつたはずである。『役者談合衝』にも、沢之丞が「おくにかぶきといふ狂言に、傾城けいせいの所作、さつはりと出来」た後、「男之助女房となり」とあることから明らかである。

土佐浄瑠璃「京四条おくに歌舞妓」では、このような歌舞伎「当世小国歌舞妓」におけるおくにの扱い方の不徹底さを解消して、発端に登場した京四条河原の遊女かぶきの太夫おくにが吉原の遊女勝山となって登場することにして筋を通したのである。

「京四条おくに歌舞妓」で太夫のおくにが吉原の遊女となり、その名を勝山と名乗ったという設定には、土佐浄瑠璃の当て込みの意図があったものと考えられる。

勝山は江戸時代初期、吉原で有名をさせた名妓であった。勝山は、はじめ丹前紀伊国風呂の湯女であったが、承応二年八月、元吉原新町の山本芳潤抱えの太夫となり、明暦二年八月退廓したと伝えられる(『色道大鏡』)。勝山は元来性大胆で異風を好み、紀伊国屋抱えの湯女の頃、寛永の頃はやつた女かぶきの真似をして、玉ぶちの編笠に、裏付の袴をはき、木太刀の大小を差して小歌をうたい、せりふなどという風体が人目をひき、多門庄右衛門などと

いう芝居の者がこの風を真似て丹前風の名の起りとなったといわれている(『異本洞房語園』^{注6})。『高屏風くだ物がたり』^{注7}にも

たんぜんのせうざんとて京いなかに名高きかつ山様とこそ申なれ

と、丹前の勝山の名が江戸ばかりでなく京や田舎にももてはやされたことが伝えられている。また、勝山は、小歌三味線は丹前節の元祖桔梗風呂の吉野直伝の名人で、その髪型や道を歩く身振りはいている草履などの奇抜さが人目をひき、勝山髷・勝山歩み・勝山鼻緒などの元祖となったとも伝えられている(『色道大鏡』)。

勝山は近世初頭の江戸の吉原で高尾と並んで人気を集めた太夫であった。高尾は寛永の頃から七代あるいは十一代もその名が継承されて、その中には仙台高尾のように仙台藩主に寵愛された名妓も出たのであったが、勝山も高尾に劣らぬ太夫としてその風俗が愛惜され、語り伝えられたのである。^{注8}『松平大和守日記』元禄七年五月十八日の条には野郎かぶきで「勝山身うけ」が演じられたことが記されている。その記事には

一、勝山身うけ 不残出
並、うき世ひやうし

^{注9}とある。勝山身受けのさまが演じられ、そのあとで遊女全員が出揃って、勝山の身受けを祝って総踊りが踊られたものと思われる。土佐浄瑠璃「京四条おくに歌舞妓」冒頭の

下
うき世ぼうしをしやんときて、^{哥トメ}はやす拍子のそろふた、

とあるのは、このような遊女かぶきの「うき世ひやうし」の再現であったのであろう。

「京四条おくに歌舞妓」のおくにのやつした勝山は、このように有名をさせた吉原の遊女勝山の名を利用し、その面影を舞台上に再現して観客の興味をひいたのである。玉ぶちの編み笠に裏付の袴をつけ、木太刀の大小をさし、小歌をうたい、芝居のせりふを口にして人気を集めていたといわれる勝山であつてみれば、「京四条おくに歌舞妓」でかぶき太夫おくにがやつすには恰好の人物であつたはずである。観客はこの絶妙の思いつきに喝采したことであろう。

土佐浄瑠璃では高尾もまた「三世二河白道」に、主人公浮世之助の馴染みの遊女として登場している。土佐浄瑠璃は、当時の江戸で評判の高かった勝山や高尾を浄瑠璃に登場させることによって観客にアピールしようとしたのである。

おくにによる脚色で第三に注目されるのは、五段めの四条河原のお国かぶきの舞台である。ここでは劇中劇の形で遊女かぶきの舞台が展開されることになる。棧敷には、「貴賤男女の見物は、きりをたつべきせきもない」状態の大盛況で、鉄山は「ゆふくと郎等左右にしゆびなさせ」て見物する。時刻になると、揚幕が

さつと上り、はしがかりからそれぞれ笛・小鼓・大鼓を持った美しい三人の遊女がしずしずと舞台中央に進み出て床几に腰を下ろす。観客の眼前に現われる女の姿態が美文調で説明され、節事になっている。

はしがかりよりしづくと。^{ナガシ}心もいとゞ。ふかみ草、^引花のかんばせほのくと、^{下ノリ}ひむくのしたぎゑもんよく、^{ギン引取}浮世はまこと。よしあしも。^中なには入江の立波に。こがれて過るあま小船。^{カ、ル}つなぎとめたるみをつくし、むねのほむらも、^入けしかのこ、いはでの山の、^入いわつし、桜ちりしく花蘭や。^本まがきが鳴の初霞。^中はつとして猶はでらしく。かい取小づま吹上て。^{カ、ル}懐にいるふへ竹の、^{ユリモドシ}よにしろしくぞいでにける。

橋がかりや揚幕のある舞台は能舞台から発展した遊女かぶきの舞台である。このような舞台に遊女達が楽器を持って床几に腰を下ろすさまは、静嘉堂文庫所蔵「四条河原遊楽図屏風」^{注10}などに描かれている遊女かぶき（佐渡島かぶき）の舞台絵と同工である。土佐浄瑠璃「京四条おくに歌舞妓」は遊女かぶきの舞台を劇中劇の形で舞台上に再現したのである。

遊女かぶきが始まろうとする時、闖入者が現われる。水仕の女である。水仕の女は女郎の小袖を借りて身につけ、「まりの曲」をかなでてきかせる。

レイセイカ、リ
ゑもんながしのまりの曲。^{リョ} ツキカエシハル入^{ハルムスビ} 乱拍子
マイヤツシ^{ユリス} 本地
此まりと、申は。ふぢ原の。まさつねまさ道の（中略）
下
手まりつく、ひいふう三よ、みよならく。松をかざして。^入
ガイドウ下リ入^入
梅のをりゑだ。それすいたしやみの手。中の町、あげや町は
下
色くらべ

これは近世初期の流行歌謡「梅の折枝」をうたい込んだ手鞠歌をとり入れたものである。「梅の折枝」は『落葉集』巻五の「手鞠女踊」に

おとは十三十四十五てはまおく、廿一二三四、御代ならく
松を飾りて梅の折枝、それさく、それすいた、三味の手一
二三四五六に七八におとは十三十四十五てはまおく、廿一二
三四、中の丁下の丁揚屋町の色くらべ、とんとつき上げ。

（『日本歌謡集成』による）

とあって、手鞠踊りの中に入れられている。真鍋昌弘氏によれば「梅の折枝」は近世初期風流踊歌や各地伝承の手鞠歌にもうたい込まれている。^{注11}「京四条おくに歌舞妓」では劇中劇の遊女かぶきの舞台で、遊女に扮した女が流行の「まりの曲」を面白おかしくきかせることにし、元禄情調を盛り上げているのである。

「ゑもんながし」の曲の名は土佐浄瑠璃「周防内侍美人桜」（宝永五年序）三段めにもでている。姫君と女房達が手鞠遊びをする

場面に、

ゑもん。ながしのきよくまりを。とんとついはひいふう三。^入
サ、ナミ^{ハル} 下
身ふりもしやんと品もよく、（中略） わかのうらへは。か
入^入 引^入 番^入
たほなみ。かたすそは、梅の折枝、中は思ひのそり橋を、嵐
にさつとわたしまり。^下

とある。ここでもやはり「梅の折枝」がうたい込まれている。「周防内侍美人桜」は、木下板の「六段物板行出来合目録」には「京四条おくに歌舞妓」の一つ前、二十六番めにあげられていて、ほとんど同じ頃の曲と考えられる。両曲に同じ流行歌謡による手鞠唄をかきせる場面を設けているのである。

「まりの曲」を奏でていた女は不意にかたわらに釣ってあった燈蓋に手をかけ、ひきかきで身をかくしてしまふ。女郎達は燈蓋を長押に引き上げようとしてうたいはやす。やがて、燈蓋はするすると上って、中から美しいおくにが姿を現わす。燈蓋に身をかくした賤しい水仕の女は艶麗なおくになって観客の前に現われるのである。

この場面は道成寺の趣向の応用である。道成寺の趣向は野郎かぶきでもいろいろに変形されて演じられている。^{注12}「当世小国歌舞妓」では第一番目で、おくにを迎えにきた山名左衛門のところへ振袖の女が逃げ込み、おくにへの進物の入った長持に身をかくす。

雲分親王が追いかけてきて、長持の蓋の下から女の袖が出ているのを見つけて蓋をあげようとするところに、狂言本には

此あいだ、まつかぜ

どうぜうじのものがたり

とあって、ここで蛇体となった清姫に捲き込まれた鐘の中の安珍を祈りによってひき出した道成寺の物語が観客に知らされたものと思われる。ここで演じられた「どうぜうじのものがたり」がどのような演技によるものであったかは明らかでないが、長持の中にかくれた女を安珍に見立てて、観客周知の「どうぜうじのものがたり」を持ち出して相関の面白さをねらったものと思われる。「当世小国歌舞妓」の狂言本には本筋の展開の間に「どうぜうじのものがたり」の指示のように二行割にして注書きをしている箇所が各所にある。例えば次のような記入をみることができる。

このあいだ	このあいだ
なりの有	下馬ろん有り
	らせう門もの語

これらの演技は、本筋に係り合っているがやや脇道にそれた事柄が語られたものと考えられる。「下馬ろん」や「らせう門もの語」などは劇の進行が一旦停止され、仕形話の演技によって演じられたのであろう。^{注13}「どうぜうじのものがたり」もこのような仕形のある語りによって行われたものと思われる。

このように「当世小国歌舞妓」の「どうぜうじのものがたり」

は本筋に関連づける形で演じられたものと思われるのであるが、土佐浄瑠璃「京四条おくに歌舞妓」では道成寺の趣向を本筋の中にとり込み、見せ場として脚色している。「当世小国歌舞妓」が道成寺に結びつけた思いつきを、土佐浄瑠璃では劇的場面として本筋の中に展開させたのである。

五

「京四条おくに歌舞妓」は遊女かぶきのかぶき女おくにの登場をうりものにした浄瑠璃であった。それは市川団十郎作のかぶき狂言「当世小国歌舞妓」を発展させたものである。かぶき女おくには土佐浄瑠璃に至って作の主筋に直接かわる重要な人物となり、主君仲秋公の恋人として活躍する。一曲はかぶき女おくにの踊りの場面が幕開きとなり、三段めには劇中劇によって遊女かぶきの舞台が再現される。歌舞伎「当世小国歌舞妓」よりもいっそう濃厚に遊女かぶきの世界を舞台上に再現しているのである。

「京四条おくに歌舞妓」はお家騒動ものである。仲秋公の地位をねらう大道寺鉄山・江平父子と、仲秋公を守る荒川刑部・小六父子の忠節を大筋とし、小六に恋する仲秋公の妹かほるの前、仲秋公に愛情を捧げる太夫おくにが配されている。歌舞伎「当世小国歌舞妓」の謀反ものの脚色を「京四条おくに歌舞妓」ではお家騒

動ものにおきかえたのである。このようなお家騒動は当時の演劇界ではしばしば採用された脚色法で、極めてありふれた劇展開である。一般的なお家騒動の脚色の中に遊女かぶきのかぶき女おくにを配したところに「京四条おくに歌舞妓」の思いつきがあったのであり、さらに、おくにに名妓勝山の面影を二重うつしにしてみせたところに新鮮な工夫がうかがえるのである。

土佐浄瑠璃には「京四条おくに歌舞妓」のほかにも、評判になった歌舞伎を応用したものが数多くある。その応用の方法は次の三つのパターンに分けることができる。

その第一は、題名と登場人物だけを利用したものである。「^{いまやう}当世薄雪」（宝永五年序）がこれである。「当世薄雪」は貞享二年森田座「薄雪物語」、元禄十三年三月山村座「薄雪今中将姫」、元禄八年初演「薄雪右衛門桜」などの歌舞伎における薄雪ものの流行をうけて、「^{いまやう}当世」と銘打ち、登場人物に薄雪や園部衛門清春などの「薄雪物語」の主人公の名を使用し、薄雪と園部衛門の恋をあしらいつながりながら横雲王子の反乱とその鎮定を主題にしたものである。「薄雪物語」からはただ登場人物の名前だけを取ったにすぎず、薄雪ものの流行を利用して全く別の主題を展開している。

その第二は、歌舞伎で評判になった場面を部分的な趣向として

見せ場にしたものがあげられる。「定家」（宝永五年序）がこの例である。「定家」の四段めには野分の局の定家への恋の執念が蛇となって定家を襲う場面がある。これは「京四条おくに歌舞妓」と同様に、歌舞伎で流行していた道成寺ものの趣向を作中にとり込んだものである。^{注14}「定家」では、作中にこの場面のあることを正本の尾題に「新道成寺」と記して強調し、絵入り本の題名には「定家」をやめて「新道成寺」を採用している。^{注15}歌舞伎の「道成寺」の趣向をうりものにしたのである。

その第三は、歌舞伎の内容を一曲の主筋の中に全面的にとり込んで脚色したもので、本稿でとりあげた「京四条おくに歌舞妓」がこれに当る。歌舞伎の応用は「道成寺」の利用のような部分的な趣向どりにとどまらず、一曲の展開に全面的に作用している。この種のものは「京四条おくに歌舞妓」の他にはあまり多くはない。僅かに「頼政」（宝永五年序）があげられる。「頼政」は元禄十三年十一月山村座の顔見世興行「頼政万年暦」の記録的な大当りの後に、この歌舞伎を利用しながら脚色されたものである。^{注16}以上のような歌舞伎摂取の脚色法によって、土佐浄瑠璃は極めて当代的性格の強い舞台を展開することになったのである。

注

注1

諏訪春雄「初代市川團十郎年譜」(『元禄歌舞伎の研究』八笠間書院昭和42年V所収)・服部幸雄『歌舞伎成立の研究』(風間書房 昭和43年)・武井協三「出雲の阿国」(『日本伝奇伝説大事典』八角川書店 昭和61年V所収)など。

注2

おくと名古屋山三の登場する「歌舞伎草子」は京都大学附属図書館蔵『国女歌舞伎絵詞』松竹大谷図書館蔵「かぶきのさうし」(旧梅玉蔵本)が知られている。これらの「歌舞伎草子」の筆者や製作年代は不明であるが、藤井乙男氏が指摘されたように(『歌舞伎草子』八『芸文』大正3年7月V)、名古屋山三郎の死去(慶長9年)の後間のない頃と考えるのが妥当であろう。

注3

駿府中かぶき女并傾城共多して、動は有喧嘩、依之可払之由大御所曰、(『当代記』慶長十二年五日廿日八『史籍雜纂』による)国立国会図書館蔵。『江戸板狂言本』一(佐藤恵理・鳥越文蔵編 古典文庫 昭和58年)所収。

注4

拙編『土佐浄瑠璃正本集』第一(角川書店 昭和47年)所収。

注5

『異本洞房語園』巻上に次のようにある。

勝山丹後殿前風呂屋に居しときもすぐれてはやりたる女なり寛永の頃はやりし女かぶきの真似などして玉ぶちの編笠に裏付のはかま木太刀の大小をさし小唄うたひせりふなどいふ其立振舞見事にて風体至てゆく敷見へしと也多門庄右衛門などいひし芝居者も勝山が風を真似し故丹前の名は此かつ山より始る神田丹後殿前なれば丹前の勝山といひたり(『燕石十種』第三による)。

注7

『遊女評判記集』(天理図書館善本叢書11)所収。

注8

京にも勝山という名の遊女がいたことが知られている。『嶋原集』(明暦元年刊カ)の「松之部」に、勝山について次のように記されている。

さらぬ名のいかさまにもあるへきに。江戸になそへなく時めくを。勝山といふなるに。それにうらやみまねびて。名つけらる

。かたはらいたき事とぞ。(『近世初期遊女評判記集』古典文庫)

勝山は、京嶋原の中の町一文字屋梅村七郎兵衛抱え、承応二年五月出世、大夫となり、寛文五年七月太夫職を辞し、天職に下り、寛文六年十二月に退職した。その名は江戸の勝山にあやかつて名づけられたものである。江戸では勝山の名は何代にもわたって継承されるというようなことはなかった。

注9

若月保治『近世初期国劇の研究』(青磁社 昭和19年)による。

注10

守随憲治・秋葉芳美『歌舞伎図説』(万葉閣 昭和6年)所収「第六回A六曲屏風 京四条河原佐渡嶋歌舞伎図(岩崎小弥太氏蔵)」

注11

真鍋昌弘『中世近世歌謡の研究』(桜楓社 昭和57年)

注12

拙稿「土佐浄瑠璃の脚色法(四)―新道成寺「定家」の位相―」

注13

(東京女子大学『論集』第33巻第2号 昭和58年3月)参照。

松崎仁「野郎歌舞伎と能狂言」(『元禄演劇研究』八東京大学出版会 昭和54年V所収)に、野郎かぶきの劇中にとり込まれた仕形話の演技についての考察がある。

注14

注12の論稿に詳説がある。

注15

注5掲載書の「定家」の解題参照。

注16

拙稿「土佐浄瑠璃の脚色法(六)―鬼神退治もの―」(東京女子大学紀要『論集』第36巻第1号 昭和60年9月)参照。

(とりい ふみこ 本学教授)